Osaka University Knowledge Archive

Title	＜紹介＞加藤昌嘉著『揺れ動く『源氏物語』』
Author(s)	石原, のり子
Citation	語文. 2012, 98, p. 52-52
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/69197
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

加藤昌嘉著『揺れ動く『源氏物語』』

石原のり子

「ホンモノの『源氏物語』などどこにもありはしない」という著者の言を引くと、「日本文学の最高傑作を冒涜する過激な主張！」と、反発を覚える人もあるかもしれない。しかし、それは大いなる誤りである。

「『源氏物語』は揺れ動く」、と著者は言う。約二百種にのぼる写本の本文が、句読の切り方によって文の気脈が、そして、どこからどこまでが『源氏物語』かという境界が。

第Ⅰ部では、写本ごと、時代ごとに、本文がどのように揺れ動くかを丹念に追っていく。第Ⅱ部では、写本と向き合い、一から句読点、鉤括弧を付すという作業から、精緻に、また大胆に、諸本を読解して見せる。そして第Ⅲ部では、散佚した巻々を起点として、『源氏物語』がどのように読み継がれてきたかを考察する。

本書に貫かれるのは、これまでに存在した、また現存する写本すべてが『源氏物語』であるという思いである。そして、ひとつひとつの写本を尊重し向き合う姿勢である。本書には、新編日本古典文学全集や新潮日本古典集成（とその注釈者）に対する批判ともとれる箇所がある。しかしそう受け止める人があるとすれば、それは本書の趣意を理解できていないと言わざるを得ない。著者が批判しているのは、注釈書―他人の手による校訂・解釈の加わった、言うなれば、『新編全集源氏』や『新潮集成源氏』―だけを見て、『源氏物語』を論じること、『源氏物語』研究者を標榜することである。

『源氏物語』は、優れた作品であるだけに、作品のうちに閉じこもって論じることもできる。文化的遺産として祭り上げられることも、文献的な価値を言挙げされることも、ある。しかし、『源氏物語』を称揚するあまりに、作品研究と本文研究が乖離してしまうことや、約二百種にのぼる諸本の、豊かな世界が顧みられないことは、不幸であり、何より『源氏物語』の価値を矮小化させるものではなかろうか。

本書は、かくのごとき〈研究〉のあり方に疑問を呈し、警鐘を鳴らす。この批判は何も、『源氏物語』研究者のみに向けられたものではないだろう。その意味で、研究を生業にする者、研究の道に踏みださんとする者への、覚悟を問う書として、座右の一書と言えよう。また、『源氏物語』の写本たちの見せるとりどりの貌に触れる愉楽、丹念に読み、解釈をするという作業の刺激的な魅力にも触れさせてくれる書でもある。『源氏物語』の中に張りめぐらされたコトバの糸を発見し、華麗な論を織り上げてきた著者。写本と向き合うことで拓かれた、新たなる加藤氏の世界に触れていただきたい。

尚、加藤氏は、本書により、第十三回紫式部学術賞を受賞された。

（勉誠出版、二〇一一年十一月、二七七頁、五、〇四〇円）

（いしはら・のりこ　神戸松蔭女子学院大学非常勤講師）